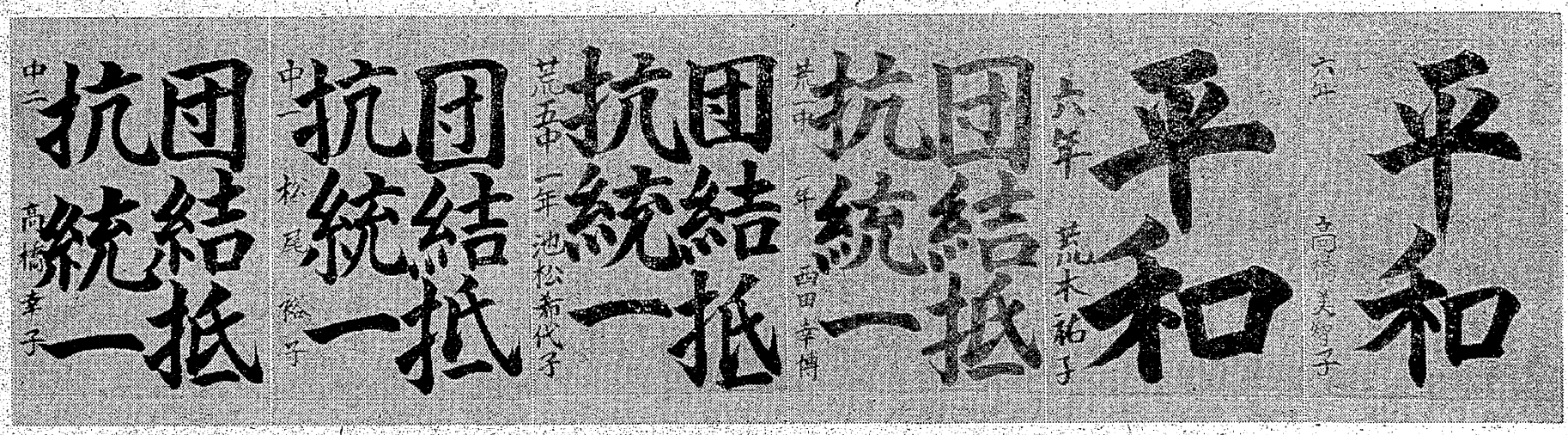

地賞（通松分会）　人賞（本所旧井分会）　天賞（宮内分会）　地賞（三川宮の前分会）　人賞（野添分会）　天賞（通松分会）

わたしのお父さん

四年一組　坂口俊子

お父さんは、お母さんがはたらいているので、家のしごとをぜんぶしてくれる。すいじばのしごと、せんたくのしごと、昼ごはんのしたく、ふきそうじのしごと、みんな、お父さんがしてくれる。わたしも、てつだう。やりおわると、あせがながれ出ている。

こんなしごとを、お父さんがぜんぶしていると思うと、いままで出ていたつかれも、みんなとれてしまったように思える。昼になると、お父さんばごはんを作ってくれる。

お父さんのごはんはつかれの出た、あじのように思える。ごはんをたべ終わると、お父さんはざぶとんをまげて、まくらを作ってねている。その顔は、楽しそうなゆめを見ているみたいで、スットする。

ときどき遊びにつれていってくれる。きぶんがいいときは、すきなものをかってくれるが、きげんの悪いときは、しぶい顔をして、どこかをにらんでいるような目つきで、あちこちを見ている。それでも、あとからは、気げんがよくなって、いろいろにやがって、にやにやしている。

家に帰ると、「きょうは、おもしろかったな」といって、ウイスキーを、ちびちびのんでいる。ねるときは、いつも妹とふざけている。うるさくて、「やかましかー」というとやめるが、またやりだす。ずいぶん妹と、なかがいいなと思ったことが、ときどきあった。

お父さんが、びょういんにいく日、くしでかみのけをさばいている。しらがが、はえている。お父さんは、もうとしだなー。

わたしのおかあさん

荒一小四年　中谷みちこ

わたしのおかあさんは、やさしい時と、こわいときがあります。やさしい時は、お金をくれたりします。こわい時は、なにをしなさいなにをしなさいといいます。わたしは、そんな時がとてもこわいです。

おかあさんのすきなテレビは「ザ・ガードマン」と「ゆうばえのなかにいた」というのがたいていすきです。

おかあさんは、毎日毎日がいそがしそうです。

わたしのおかあさんは朝は、しごと、ひるもしごと、夜はせんたくや茶わんあらい。毎日毎日がいそがしくてこしがいたいだろうと思います。

日曜日があっても朝からばんまで、しごとしごとでいそがしいと思います。それにくらべてわたしたちは、朝からばんまで遊んでいるのとかわらない。少しでもてつだってあげるとどんなになるか。

わたしは、朝は茶わんをあらってあげます。なぜかというと、朝からしごとにいくからです。夕方の五時ごろにかえってきます。

夜ねるときに、こういう時があります。

「ああ、ようやくきょうのしごとがおわった」といってためいきをします。

私のおとうさん

笹原小学校六年　奈須雅彦

ぼくのおとうさんは四十五才ですが、もうかみがうすいです。けれども、おかあさんよりすきです。おかあさんは、勉強しなさいといいますが、おとうさんは、いわないからです。

まえは日よう日に川につれていってくれていましたが、いまは委員会だからといって、ぜんぜんつれていってくれません。おとうさんは、つりがすきで、前はよくフナつりにいっていましたが、いまはうなぎつりばっかりです。

おとうさんは、こわいときがありますが、でも、ときどきだけです。おとうさんは、おもしろくって、やさしいが、せんきょなどにはねっしんです。

おとうさんは、ずいぶん長くたんこうにつとめています。ですから、なんどかけがをしました。足をけがしたときは、大分長く休みました。いまでも、足の親指が変形しています。ぼくの友だちのおとうさんも、たんこうのじこでなくなりました。

おとうさんは、みんなが安心してはたらけるような、しょくばになるようにがんばっているんだと、いつもいっています。だから、けがをせず、いつまでも長いきしてもらいたいと思います。

―詩―

おとうさん

天道小学校四年　渡辺美子

三番方のとき、おとうさんは
早くかえってくる
ごはんができるまで、
新聞をよむ
ごはんができると、大
きな口で
ガブリ、とたべるおと
うさん
わたしは、なんだか
おかしくてたまらない
おこるときは、とても
こわい
でも、わたしはすきだ

おかあさん

おかあさんは、いつも
いそがしそう
わたしが、おきてみる
と
コトコトと音がする
その音は、やさいをき
ざんでいる音だ
よく見ると、なんだか
おもしろそう
わたしが切ってみたら
細く切るのを太く切っ
たりする
なんだか、やすいよう
に思っていたのが、む
づかしいように思えた

たんこうのさいがい

五年二組　井上一哉

テレビで「たんこうのばくはつ」というのを聞くと、すぐ父のことを思いだす。

もし、ぼくの父が死んだら、どうしよう。

なぜ、あんなあぶない所で働いているのだろう。

でも、そのおかげで、ぼくたちは、食べて、生きていられるんだ。

テレビでないている人たちは、どんなにかなしいだろう。

そのかなしさは、町の人びとには、あまりわからないだろう。

「ドカーン」というたびに、何百人もの人びとが死んでいる。

なぜ、こんなさいがいがおこるのだろう。

「もう、さいがいは、ないようにする」といっている人にきくが、またさいがいがあったじゃないか。

そんなことをいう人にぼくはこういいたい。

「こんなことをいうときは、よくよくしらべてからいってほしい」と。

―詩―

空

荒中一　田川純子

無限にひろがる空
青くすみきった空
白くふんわりした雲が
うかんでいる空
空はまさしく雄大だ
雨をふらせ、時には雪
をふらせ
さまざまのゆめをえが
いている空
私が空をながめる
すると私は心の変動に
もかかわらず
清らかでゆったりした
気持ちになる
夜の空、そこには月と
星が調和し夜らしい空
をえがいている
昼の空も、夜の空も
私たちの心をささえ
それとともに人類の永
遠の平和を
いのっているようだ
私はこんな空が大すき
だ